

ミニシリーズ

乾燥地域の植物あれこれ <その2>

シリーズの第 2 回目として、乾燥地域に特有な寄生植物のいくつかを紹介したい。

アラビア半島の砂丘等で時々見かける寄生植物に、キノモリア科(Cynomoriaceae)の *Cynomorium coccineum* とハマウツボ科(Orobanchaceae)の *Cistanche tubulosa* がある。これらはいずれも、植生の少ない移動砂丘や塩類集積地にぬっと生えているのでよく目立ち、あっと驚かされることが多い。*Cynomorium coccineum* は現地では”tarthooth”と呼ばれており、英語では”red thumb”と記載されている本もある。写真に示すように、暗赤色の頭をよきと持ち上げた姿は何となく不気味である。この植物は地中海沿岸、北アフリカ、アラビア半島から西アジアにかけて分布し、一般的な宿主は *Atriplex* 等の塩生植物とされている。古くから食用あるいは薬用植物として利用されてきたという記録が多くある。一方、*Cistanche tubulosa* は現地では”thanoon”と呼ばれており、英語名は”desert hyacinth”である。その名のとおり、開花するとヒヤシンスのように美しい。この植物の宿主もやはり *Tamarix* や *Salvadora persica* 等の塩生植物が一般的とされているが、宿主から離れた植生の少ない場所に生えていることが多く、本当によく目立つ。また、種子は宿主となる植物の根が接近するまでの間、何年間も休眠状態を保つことが出来るらしい。また、この植物も薬用植物としての利用の記載があり、”tarthooth”が緩下剤として、”Thanoon”が下痢止めとして使われているのは面白い。



*Cynomorium coccineum*



*Cistanche tubulosa*

アラビア半島の砂漠でこのように個性的な寄生植物達

に出会ってから数十年後、地中海に面したシリア国の野菜畑で同じハマウツボ科のオロバンキ(*Orobanche spp.*)に出会うことになる。我々は 2005 年以降シリア国において節水灌漑農業普及計画という技術協力プロジェクトを展開している。トマト、キュウリ、ナスといった野菜栽培が盛んな南部地域も、このプロジェクトの対象地域となっている。この地域では、”harook”と呼ばれるオロバンキがトマトやナス畑の雑草として地域の農民を悩ませている。多くの農民は土壌を過湿状態に保つことによってオロバンキの出現を抑えることが出来ると信じており、必要以上に多量の水を灌漑する傾向が強い。これは、水資源の枯渇が進んでいるシリア国における節水灌漑の普及を目指す我々のプロジェクトにとっても、頭の痛い問題となっている。つまり、プロジェクトとしては各作物の要水量に基づいた適正な灌水量を農民に指導しているものの、農民達としては雑草を抑えたいがために多量の水を灌漑することになり、このことがプロジェクトの効果に負の影響を及ぼしている。



*Orobanche spp.*

さらに最近、我々はスーダンにおける農業開発にも携わる機会を得て、ここでもよく似た植物に出会うことになる。それが、ハマウツボ科のストリガ(*Striga spp.*)である。この植物はソルガムやトウモロコシといった穀物を宿主とし、農園全体に壊滅的な被害を及ぼすこともあり、アフリカを中心にその被害が拡大している。ストリガの被害を受けると、穀物の畑が一瞬にしてお花畑に変わり、それがまるで魔法の魔女の魔法のようだというので Witchweed(魔女草)とも呼ばれている。



*Striga spp.*